

Ⅳ 学生相談室活動報告

＜出会いのためのグループ合宿＞

「encounter group 概況と効果に関する考察（Ⅰ）」

豊 嶋 秋 彦*

はじめに

近年、多くの大学で、非適応学生に対する集団治療的接近として、あるいは、適応上の問題をもたないかあっても周辺的な学生に対する相談機能の拡大という意図もこめながら、様々な group approach が試みられている。我々は group approach を学生の人格的成長・自己開発を援助する積極的精神衛生活動と位置づけ、集団場面での出会い（encounter）と自己発見を追求する目的のもとに、昭和51年度から「＜出会い＞のためのグループ合宿」を実施してきている。本論は、昭和52年度の「合宿」について、かかる実践活動の概況を報告するとともに、参加学生における合宿効果の分析枠組を提出しながら、合宿場面での効果と、比較的長期の case 経過における効果を位置づけ、今後の実践と研究の手掛りを求めることを目的とする。^(註1)

Ⅰ 「第2回＜出会い＞のためのグループ合宿」概況^(註2)

(1) 目的・手続

①集団過程における「出会い」と自己発見を通じた、感情的～認知的水準での positive な変容、
②講演を通じた知的水準での支え、の二点を主要に意図し、前年度の試行にならって、グループ・セッション（以下GS）を軸に前後にリラクセーションと講演を配するプログラムを作成した（図1）。

学生に対しては①②の両面からPRし、1年次学生に対しては特に、教養部の心理学の講義時間を措用し次のような案内を配布・勧誘し、また各学部に募集要綱（ポスター）を掲示し周知をはかった。また、センターへの来談経験者から、参加による効果の予想できるものに対して案内状を送した。ファシリテータは5名である。

* 学生相談室相談員（室長 松井哲郎教授）・保健管理センター講師

第2回「＜出会い＞のためのグループ合宿」への案内

あなたは、学生生活や自分自身のことについて、自由に考えを伝えあい、共感しあい、その中で真実の自己を発見する、そのような場をもっていますか……。

学業のこと、友人関係のこと、自分の性格、生き方、人生観、その他どうということでも、3日間寝食を共にし、徹底的に話し合ってみませんか……。

私たちの人生は、絶え間のない＜出会い＞であると言われていますが、こうした深い“出会い”は、日常生活の流れの中ではなかなか体験できないことも事実です。弘前大学学生相談室では、今年も、こうした、友との、師との、人生観との、＜出会い＞を求めるグループ合宿を開くことにしました。ここでは、「他者との出会い・自己との出会い」「人生観・人生目標の追求」をめぐる2つの講演と、小グループでの形式にとらわれない、自由な話し合いを通して、＜出会い＞の体験をもつていただき、自己発見に、今後の学生生活に、生かしていただくことを目的とします。

講師の先生方も、裸で話し合いに参加します。友達と誘い合って、あるいは、未知の友を求めて、合宿にとびこんでみませんか……。

募 集 要 綱

日 時 昭和52年11月12日（土）午後から14日（月）午前まで 2泊3日

会 場 国民宿舎「岩木荘」（中津軽郡岩木町百沢）

講師・スタッフ 東北大学教養部教授（心理学） 黒 田 正 典

東北大学文学部講師（学生相談所相談員） 細 江 達 郎

弘前大学教育学部講師（発達心理学） 清 俊 夫

弘前大学保健管理センター講師（学生相談室相談員） 豊 嶋 秋 彦

・もう1名、青年の心理に詳しい医師又は心理学の教官に交渉中です。

参 加 費 用 ・2泊3日の食費等 3,000円、交通費（往路）300円（14日は現地解散）

申し込み方法 参加費用 3,300円を添えて、10月22日（土）まで、弘前大学学生相談室（保健管理センター内）に申し込んで下さい。（募集人員20名に達した場合は、〆切日前に〆切ることがありますので、お早目に）

問 い 合 わ せ 先 弘前大学学生相談室（TEL 36—2111 内線2372又は2375）

図1 プログラム

12日(土)

12:45	13:30	14:30	16:15	17:30	19:30	21:30
出	室長あいさつ	オリエンテーション	講演Ⅰ (黒田教授)	討 論 黒田先生 を囲んで	夕 食 入 浴	グループ・ セッション (GS) Ⅰ
発						自由時間

13日(日)

9:00	10:30	12:00	13:00	15:00	17:30	18:00	20:00	20:30
GS Ⅱ	講演Ⅱ (竹内教授)	討論 昼食	リクリエ ーション	GS Ⅲ		コ ン パ 自由討論	GS Ⅳ	自由 討論
							23:00	14日1:00

14日(月)

9:00	11:00	12:30	13:00	
GS Ⅴ	全体の集まり	昼 解 食 散		室長あいさつ 保健管理センター所長 松井 哲郎教授 学 生 相 談 室 長 講演Ⅰ「人生観・人生目標の追求」 東北大 黒田 正典教授 講演Ⅱ「現代の青年期—主としてidentityをめぐって」 弘前大 竹内 照宗教授

(2) 全体的経過

ここでは日程にそった概況を報告し、若干の考察を加える。

・第1日

オリエンテーション……保健管理センター松井所長の挨拶ののち、ファシリテータと学生の自己紹介を行ない、さらに、合宿への参加動機を自由記述させた。細江講師より、エンカウンターグループに関する一般的オリエンテーション、注意事項等の説明があった。

講演Ⅰ……2時間15分にわたって、黒田教授から、自己受容の重要性について、事例や自らの体験を紹介しながら講演され、とくに、人生目標・人生観・悩みの解決法に関して自己受容との関連で具体的に述べられた。

討論・黒田先生を囲んで……講演に対する質問をうけつける中で、参加学生から、志望進路に関する悩みがうち明けられたのを契機に、志望進路と、それに対する親の期待との葛藤について学生間で討論が進展した。各自のかかえている問題を土台に、対立する意見をのべるもの、一方に加担するもの、それを止揚しようとアドバイスを与えるものがあられ、活発であった。

次に、この討論に聴き役としてのみ関わっていた半数の学生に、自分の悩みについて語らせる中で、例えば、入学時の進路決定に関するトラブルに由来する未整理の感情を激しく表出するものもあられ、総じて、参加者のかかえている個人的問題の概要が、この段階ですでに表現され、相互に確認され始めることとなり、予想外に深い幕開けとなった。

また、グループ編成について、「全員を知りたい」という希望が出され、GSⅠは前以って我々が分化したグループに従うが、毎回グループを交替する事で全員が一致し、積極的な姿勢がみられた。

GSⅠ……第1グループとして、前以って保健管理センターで把握していた、精神衛生面の問題や進路に関する問題をもつ者を中心とする群、第2グループをそれ以外の群とに分け、2名ずつのファシ

リテータをつけた。

第1グループは、まだ堅さがとれず、1・2の学生が自分の問題を性急に話したが、他の学生はまだ自分との共通点が見出せない事もあって対応できない。めいめいポツリポツリ話すにとどまり、むしろ、ファシリテータと各自との間の会話が主であった。

第2グループは、「黒田先生を囲んで」中心的話題となった親からの自立期における親子関係にテーマがスムーズに絞られ、自由な意見交換がみられたものの、建前論的・優等生的なものにとどまった印象がある。

・第2日

G SⅡ……前日の学生の要望に基づいてグループを再編することとなり、学生の自主的な編成にまかせる事にしたが、やはり相手を選びにくいのか、トランプで決定することになった。そのまま、ファシリテータも加わった card game になるが、結果的には、前日の G SⅠで前面にあらわれた学生の防衛的構えがとれ、リラックスできた点では有効であった。

講演Ⅱ……竹内教授から、青年期の発達課題とアイデンティティの問題について、Havighurst: Erikson を引きながら、発達心理学的な講演をいただいた。

討論・竹内先生を囲んで……アイデンティティの問題について、若干の質問等があったが、昼食と重ねたこともあって活発とはいえない。人文学部の学生から、「心理学とは縁遠い学部の人（例えば人文など）ほど興味をもってきけるのではないか」との感想が出された。

リクリエーション……全員で岩木山神社に散策した。道々、ファシリテータを囲んで、将来の進路のことなどが話しあわれた。また、高校・大学と、教育である事を意識することなしに、教育と共に散策し、交流できる機会がなかった事に今更ながら気づき、「こうして散策を共にしている事が不思議な気がする」と語る学生もあらわれる。

G SⅢ……G SⅡの結果、新しいグループ編成となる。第1グループでは、大学進学時のトラブルや受験制度に対する不満・退学志向等について、全員が語る。他の学生の悩み・不満・情緒の混乱を敏感にまとめ上げ明確化してやる学生もあらわれ出す。第2グループでは、友人関係、男女交際の問題を中心に展開し、ファシリテータは交通整理役として関わっていく。

コンパ……G SⅢに引きつづきの討論となった。個人的問題について周囲の学生やファシリテータと話し込む姿がみられる。

G SⅣ……G SⅢと同じグループ分けで続した。

第1グループでは、入学後生活の焦点が拡散してしまった自己について語り出す学生があらわれ、それに対して、友人を作り、友人と支え合うようにアドバイスする学生、友人に援助を求める態度への否定的意見など、友人を支えとする態度の是非を巡る激しい討論がある。テーマは次第に、援助を求める前提として防衛的構えを取り去るべきか否かに焦点を移し、それを契機に、それまで集団の中で防衛的かつ自己顕示的にアドバイザーとして自己定位していた学生が、「他者に援助を求めたいから、ありのままの自分を出す」として防衛的構え1部を捨て、自分の neurotic な体験・その受容の努力・他者に依存したい気持などを躊躇しながら語っていき、そのひたむきさが全員に了解される中で、それまで隠していた自分の neurotic な体験をはじめて打ち明けながら彼を支えようとする学生もあらわれるなど、ダイナミックな集団展開がみられた。

第2グループでは、1人から《死への恐怖》の体験と、その人なりの結論を語り出す学生、不安を示しつつも自分の生き方を模索してきた過程を素直に淡々と表現する学生などがあらわれた。ただ、第2グループでは、学生とファシリテータとの間の対話が、やや多かったり、個人的問題が全体化して行かない不満を（合宿後）表明した学生も二・三ある。とはいえ、彼らも、集団の中で自らの思考過程を表現したり、参加者からの支えや批判をえる中で、従来の認知枠組が拡大したり、相対化に向って動き出した旨語っている点で、有効な G S だったといえる。

自由討論……G SⅣ終了後、学生の中で、ファシリテータの体験や問題の整理の仕方について話がききたいとの要望があり、深夜まで話し合いが行なわれた。ファシリテータは1時ごろ引きあげたが、

学生は各室に分かれて3時ごろまで話し合いをつづけていたという。

・第3日

G S V……「まだ話を聞いていない人の話をききたい」との申し出があり、再度グループがえを行なって、4グループに分かれた。まだ話を聞いていない人の話をきく、まだ話していない人に話しをするという段階にとどまったようである。

全体の集まり……各自に合宿の感想を自由記述させたあと、1部から、「このグループでこれからも集まらねばならぬのか」「今後、保健管理センターに行かなければならぬのか」等の不安が表明されたために、そのような義務的拘束は一切ないこと、この合宿での体験を個人的に意味づけ位置づけてそうする必要があると思えばそうしてもいいこと等、“here and now”の原則の他、一般的な注意事項を伝えて散会した。

(3) 小 括

以上、芯のある問題をもって参加した者を中心に、第1回目の講演直後の段階ですでに個人的問題を集団の場で表現する態度がみられたものの、G S Iではまだ、防衛的構え「～と思う」といった思考的・知的レベルでの優等生的発言、それに対して性急な問題解決へのあせり等がみられ、咬み合わない。しかし、G S IIでのカードゲーム、リクリエーション、コンパを通して、学生相互・学生対教官の疎隔感や防衛的構えが徐々にとり去られ、相互の親密感が醸成されていきG S IVをむかえた。G S IVは、出会いの観点からいえば、他者の悩みに出会い「同じ悩みを他の人ももっているんだな」といった端初的な共感をえたり、相互援助しあう段階に至ったグループもあり、また、自己発見の観点からいえば、自らの悩みの独自性と相対性を集団の中で確認したり、認知枠の拡大を経験したり、防衛を一部解除し、他者の前に自らを露す新たな自己を発見したりする段階にまで至った者もあらわれるなど、合宿テーマ〈出会いと自己発見〉に沿った展開をある程度獲得できたと思われる。

全体的には、「相手の話をきく、相手に話をきかせる、知らない人とある程度知りあったというレベル」（細江）にとどまり、それを超えて、自然な感情の吐露やぶつけあいを通じたより深い集団過程・洞察過程を実現できたとはいえない。しかし、試行的性格が強く、しかも、2泊3日という限られた時間枠の合宿としては、「まじめに内面にとりくもうとする人や相手の立場に立って考えようとする人、グループを良い方向に維持しようとする人がいて、（グループの一員として）大変気持の良いグループ体験であった」（細江）といえる。

Ⅱ 効果に関する考察

(1) 効果検討のための基礎的枠組

本合宿の究極的目標として我々は個人の「成長」乃至は「発達（自己開発）」を掲げ、また、合宿場面での「出会い」と「自己発見」を獲得目標として設定し、その具体的手段として、G Sと講演を組んできた。ところで、「成長・発達」とは価値内包的概念であり、望ましい・発達さるべき価値の内容は規範学的乃至は価値哲学的な検討を抜きにしては確定しえない（豊嶋、清・1978）のに

対して、我々は、group approach 実践について、かかる価値の確立をまだなしえていない。そこで今回は、次の二つの側面の双方あるいは一方が満足された事態を「合宿体験の成長・発達への寄与と抱えたい。

まず第1の側面としては、A—(i)各事例の主訴を形成している生活空間内社会領域に対応する客観的な社会的行動空間（以下「主訴形成の場」と呼ぶ）における、その人格の社会（文化）適応を準備・強化する方向に合宿体験が機能していること、即ち、合宿体験の、主訴形成の場での社会（文化）適応への寄与、あるいは、A—(ii) 主訴形成の場以外の社会的行動空間について、人格の社会（文化）適応を強化・拡大する方向に合宿体験が機能すること、即ち、合宿体験の一般的な社会（文化）適応への寄与、の二つをあげる。第2の側面としては、B—(i)主訴の解消（決）、主訴形成の場における中心的 motive の充足乃至は充足展望の獲得や、主訴の解消（決）に主体的に焦点化されながらなお解消（決）しえない場合の、主訴形成の場に対する tolerance の獲得・増強など主訴形成空間（社会・文化）の人格適応を準備・強化する方向に合宿体験が機能していくこと、即ち、合宿体験の主訴解決への寄与（主訴形成の場の人格適応への寄与）、あるいは、B—(ii) 合宿体験乃至はグループが、合宿後において、空想水準での中核的自我領域となったり、合宿体験を契機にして主訴形成の場を無適応領域として分化し、主体的に周辺化していく機制などを通して、生活空間構造の再体制化を支え準備する方向に合宿体験が機能していくこと、即ち、主訴形成の場の生活空間構造内周辺化（非適応領域の周辺化）による間接的な寄与、の二つをあげる。この二つは、いずれも合宿体験による自我支持と総括できる。

ここで、B—(ii) の規準からは、所謂 groupie の発生は逆効果（池田、1975、小谷、1976）を必ずしも意味しない。グループを渉り歩く事をマイナスと裁定する文化規準を我々が積極的に採用するか、あるいは、グループが空想水準での中核的自我領域と化することによって現実的な社会生活における人格—社会（文化）間の適応度が低下する場合に始めて、それを逆効果と位置づけ得るのである。

また、主訴形成場面が、客観的・潜在的問題の形成空間（問題形成の場）と必ずしも一致しない事は言うまでもない。

以上の二つの側面が、長期的経過の中での効果の確定の規準であるが、同様に、合宿期間における合宿場面という時空間的枠の中での効果、即ち、合宿場面内での効果（以下「場面的効果」）は次の二つの側面から捉えることができる。

第1の側面はまず、C—(i) グループに存在または成立する集団的規範・雰囲気注目して、それらを参加者が支えたり、あるいは逆に、それらによってプラスに裁定されること、即ち参加者の集団（グループ）適応が獲得されること、である。この場合、問題となる集団的規範・雰囲気が、参加者の日常生活領域に支配的な社会（文化）的規準が合宿にもちこまれたものか、合宿参加者としての役割概念に規定されたものか、それとも、集団過程の中で創造されたものなのか、などは、我々の定義の水準では当然問われない。次に、C—(ii) 他の参加者の場面的な人格適応を支えたり、

他の参加者からプラスに評価されるといった1対1の関係における他者に対する適応である。

第二の側面は、D—(i)・前述のC—(i)、(ii)と同様の寄与が合宿場面においてえられた場合から、参加動機（すなわち、「合宿への主訴」に関わる）の充足までを含む、合宿場面による自我支持、即ち、合宿場面の人格適応、あるいは、D—(ii)・1対1の関係における他者からの自我支持、即ち、他者の人格適応、である。^(註3)

以上、長期的一場面的、社会・場面・他者適応—人格適応、主訴との関わり、という三つの軸から事実認識としての記述・分析のための枠組を構築した。この枠組で以下、場面的効果と長期的効果とを検討していく。

(2) 場面的効果の検討——参加動機と合宿場面による自我支持について——

ここでは前節で提示した規準D—(i)、D—(ii)について、場面的な合宿効果を検討するために、オリエンテーション直後に求めた「応募動機・合宿への期待」（以下、参加動機）の自由記述と、解散前に求めた、日程を追っての感想文から、参加動機と、その充足—非充足、及び、合宿場面での自我支持体験に関する部分に注目した。

○参加動機：まず多様な参加動機をいくつかの型に分類する。この際、できるだけ広範囲の動機をおおい得る分類を獲るために、51年度合宿参加者に求めた同様の自由記述・感想文も分類資料として利用した。分類結果は次の通りである。（52年度の該当数—当該動機*が中心的なものの数、（ ）は51年度該当数）

（*）単一の動機をあげた者、又は、複数の動機があげられている場合、記述の比重の最も大きなものをとった。

- a. 対人関係をめぐる問題の解決の緒をえたいとするもの：対人関係領域変容型……………3—3、(4)
- b. 「変身。視野を広げたい。自分の殻を破りたい」等、認知枠組—生活空間構造枠組の変容の緒としたいとするもの：枠組変容型……………1—0、(4)
- c. 「物の見方を掴みたい。大学生生活の総括をしたい。自分の問題を確認したい」等：自己確認～枠組確立型……………4—4、(2)
- d. 「出会い。話し合い。人の話をききたい」等、学生間の交流を求めるもの：学生間交流型…4—0、(4)
- e. 教官との交流を求めるもの：対教官交流型……………1—1、(4)
- f. 「何かを求めて」としか表現していないもの：不明確型……………2—1、(1)
- g. 心理学や講演への関心・その他の情報を求めるもの：知識・情報型……………4—1、(2)
- h. 「他人の本音をききだしたい。どういう催しかみてみたい」等、興味本位型……………2—1、(2)

今回の参加者についてみると、a、c、d、gの動機を当初頭わす者が多いが、中心的な動機としては、a、dが多い。一般的な交流d、eが中心的な者は見当たらない。h（興味本位）を除いて、何らかの適応上の問題を意識しながら「何かを求めて」参加したといえる。

なお、a～hを、その動機の自我中核—周辺性、合宿目標（出会い・自己発見）との関連の二点に注目して配列すると図2の通りである。つまり、参加動機は、合宿目標や我々の勧誘焦点（1の(1)参照）に規定されつつ、不安定な対人関係や未確立の自己の枠組の変容を求め、知識・情報を求めるという全体的構図をえがくことになる。

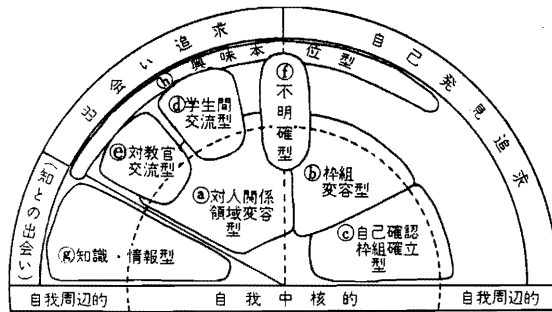


図2 参加動機の型

○参加動機の充足—非充足：参加動機が満たされたか否かを、感想文から判断する。(f.不明確型の2つを除いて、参加動機にふれていないものは皆無。h(興味本位型)では、「人の本音をききたいなら自分の本音を積極的に話さねばならないことがわかった」等、当初動機が的はずれだった旨述べているので動機型の欄から除き、他として取扱った。)

表1 当初動機の充足感

動機型	充足	やや不満	非充足	他
a	1		2	
b	1			
c	3	1		
d	4			
e	1			
g	4			
計(%)	14 (66.7)	1 (4.8)	2 (9.5)	4 (19.0)

全体的に当初動機の充足感がえられているが、a型の非充足感2名は、いずれも「人前で話せない」事を主訴とし「深く問題を考えている人達に圧倒された」事が一要因となり、「自分のことはどうしても話せなかった」とする者であり、その点で不全感を残し、ファシリテートの方法や、日程の問題とも関わっている。また、c型の非充足1名は、「自分の問題の共同解決・共同確認を期待していたのに、ファシリテータとの(放射状ネットワーク的な)個別的語らいに終わった」点を不満としている。要するに、ファシリテート方法と日程の改善によって、より大きな場面的効果を獲得できると思われる。

○合宿における自我支持体験：参加動機の充足以外に、合宿体験がいかなる自我支持機能をもっていたかを、動機型ごとに検討する。

(7) a型動機を中心とするもの

動機充足の1名は「他にも同じような悩みで悩んでいる人がいる事」から生じた共通感情と、それに基づいて他者を「情熱的にアドバイス」した自らの行動、さらにアドバイスが他者から受け容れられた成功体験(即ち、自らの集団適応—他者に対する適応行動それ自体)等によって自我支持される。

動機非充足の2名は、前者と同様の共通感情をもつものの、他者の方が「悩み・問題を深く考えぬいている事」を知り、積極的に自分の問題を考えていく態度の必要なことを認知する。他者の態度が主訴へのとりくみのモデルとして認知されたという意味で間接的な自我支持体験を含んでいる。

(イ) c型動機を中心とする者

同じような主訴、問題に対して多様な見方があり、皆自分なりの解決努力をとっている事を知って主体的解決の態度を出してくる者が3名（非充足者1名もこれに含まれる）他に、講演に勇気づけられたとする者が2名ある。

(ウ) g、h型動機を中心とするもの

「皆1人の人として生きている事を実感し、とうとう自分を出してしまった」「自分の表面的な話を批判された」「本音をききたいなら自分の本音を出す事が必要だとわかった」等、グループの集团的雰囲気と、自らの参加動機、防衛的構えとの間の異和を認知することによって、自らを集団に適應させ、その結果、日常の対人関係ではえられない質の interaction に達した事で充足感をえている（2名）。他に、ファシリテータとの対話によって進路展望が明確化されたことを指摘する者（後述の case 3）があり。これはファシリテータによる自我支持体験といえる。

(エ) 他

f（不明確型）中心の者（後述の case 2）は、感想文では「食事がおいしかった」と述べるにとどまる。

e（対教官交流型）中心の者は、当初動機の充足を指摘するにとどまった。

全体的に、他者の悩みや perspective にふれ、かつ、自己を開く態度を通して自我支持体験をえた事例が多いといえ、その意味で、各参加者個々は自・他の「より内密な問題にふれ、全体の動きもその力動機制に深く言及」し「同じ悩みが他人にもあることを知り……共通感情をもつ」段階（対馬・福井、1972、p.6.）に達したと思われる。

また、(ア)・(イ)・(ウ)のように、当初動機が自己発見・出会い・講演のいずれに焦点づけられているかにかかわらず、自己表出—発見と出会いの相互作用の中で自我支持体験がえられている点に注目したい。

さらに、(ア)・(イ)では、主訴の主体的解決への態度、(ア)・(ウ)で対人関係に開かれる態度への変容が観察され、先に提出した「成長・発達」の定義の水準を一部超える展開をみた点、「成長・発達」なる価値内容（方向）の確定にとって示唆的である。

なお、(ウ)における「ファシリテータとの出会い」効果の指摘は、formalな地位・役割規定の体系から相対的に自由な対人関係獲得の readiness たりえ、(イ)における「講習—知との出会い」効果は、知性化の支えとして機能し得る。従ってこれらを group approach の副次的機能として自覚的に追求することもできるであろう。

以上、合宿の場面的効果について考察した。

(3) 長期的経過における効果の検討

ここでは、参加者のうち保健管理センター来談その他の機会を通して合宿前後の状況を知りえた3名について、合宿効果を比較的長期的経過の中に位置づけていく。

事例1（女子）

偶々、合宿2ヶ月前に実施した保健管理センターの呼び出し面接の結果、退学志向が強い事が明らかになった事例である。手に職をつけようと、当初志望は各種学校であったが、職業的 社会化 水 路 的 gate-keeper（両親—特に父が学歴志向強）に従って、大学→教員の展望の下に受験し合格した。大学での友人はいない。専攻には関心が高く、入学直後関連の実践サークルにも加入しているが、専攻の教員になろうとする motive は弱く、「退学して手に職をつけたい。手芸関係が良い」「情緒不安定で人前

が苦手なので先生には向かない」と動揺を繰り返しながら、夏休み明けには、「姉夫婦や叔父・高校担任に相談してやめることに決めた」という段階に至って、ここで筆者との接触が開始されたのである。

ところが、退学後の進路を巡る数回の面接の中で、①手芸学校→室内装飾→ケーキ職人見習→パン屋見習等志望先が転々と変化する、②入職する可能性・修業生活への具体的展望・店を出したいとする彼女の出身地（農村）の狭く薄い文化的環境の中で自活していける可能性等の現実吟味が全く欠落、③情報収集を勧めても動きが鈍い、④それに対して「何日何日の連休に帰省し両親に退学の決心を伝える」（結局伝えなかった）といった事実や行動があらわれ、未洞察の葛藤が予想された。

「今まで自分の路を自分で決めた事がなかった」「退学するのは親に悪い」という、その後の洞察に示されるように、中核的自我領域である家族に対する自立（反撥）—親和の moments 間葛藤によって家族が客観的（潜在的）問題の形成の場となり、更に、自立欲求内部で、教職への不安—空想水準での手職志向の moments 間葛藤によって、大学生活が主訴形成の場を構成していると考えられたのである。

そこで、それら葛藤の洞察の進展、青年期の発達課題としての《親からの自立》問題に他の学生がいかに対処しているかの情報提供、という二つの機会として合宿に勧誘する。合宿には「ものの見方を学びたい」という c 型動機と、心理学への関心、即ち g 型動機で参加。合宿においては、①第 1 日目から自立期における親との関係が自然に討論の焦点となり、同様の葛藤を経験中の学生の統合的解にふれる事でえた共感的自我支持、②素朴な感情・思考の振れ動きをありのまま表出しようとする本事例の努力がグループに受け容れられる事、即ち、集団適応を通じてえられた自我支持、③教職への不安の一因であった「情緒不安定」なる自己観が、高校の進路指導教員が示した Y-G raw data と無配慮な解釈にも由来している事が G S I で明らかになり、それを他参加者（ファシリテータも含む）が否定し勇気づける事、即ち、集団適応を通じてえられた自我支持、④、③を通して自己観変容への姿勢をみせていく事などが観察される。参加動機は充足。感想文では「一段とかしこくなった気がする。自分を客観的に見れるようになった」と記述し、また、筆者には「退学については考え直してみる」と語って散会となる。

合宿後は上述の葛藤の洞察をえて 1 回の面接で終結になった。その後、本事例は、技術を副専攻とする事によって手職志向と教員展望を結合させながら、友人作りをも中核的活動とし、家族—人格間の適応も良好な状態にある。退学志向が消失したのは言うまでもない。

要するに、合宿での①によって自立—親和の葛藤解決の契機を得、③によって教職不安の解消の契機を得る事を通して、合宿—人格間の両側適応が形成され、それが更に、客観的問題形成の場（家族）との関係における両側適応を準備し、同時に、主訴の解消、即ち、大学（生活）の人格適応を準備していたものと解され、場面的・長期的双方の効果がえられたといえる。なお、54年度には、中核的自我領域が家族から友人関係へと移行しつつあり、発達課題論を前提とすれば、「発達」として捉え得る。

事例 2（女子）

第一志望の私立女子大学（東京）に合格し、東京での学生生活を開始して間もなく、弘前大学の合格通知があって両親から強制的に呼び戻されて弘前で生活に入ってしまった事例であって、大学・弘前の街、両親に対する強い拒否感情をもち、同クラスの学生とも殆ど交流がなかった。

合宿には同専攻の参加者からの勧誘による。参加動機は「何かがあると思って」という f 型。第 1 日の講演終了直後の時間（「黒田先生を囲んで」）に、他の参加者達が自分の問題を表出するのに続いて、弘前に来る事になった経緯とそれを巡る感情、両親への攻撃的感情を激しく表出し嗚咽する。嗚咽しながら「教養部クラス担任に相談に行ったがつき放された」「両親はいない。ひとりぼっち」「弘大生と話をするのは入学してはじめて」と語り、現実水準においては、少数の高校時代の友人（弘前にはいない）以外、対人関係—生活の全ての領域が主訴形成の場と化している事が明らかになった。家族が生活空間構造内で比較的中核部を占め、かつ、客観的（潜在的）問題形成の場を構成している。

さて、合宿ではその後、世間話から東京生活の話、入試体制への疑問などを語り、集団に積極的に関わる構えをみせ、また、h 型の参加者を批判したり、他の参加者を支えたりと《弘前大学》との交流に

入り込み、集団適応を果たしたと言えるが、それが本事例にとって自我支持体験であったと言える証拠はなく、片側適応に留まる。感想文は前節でふれた通り食事に関する感想三行のみであった。

所で合宿後、実は両親健在である事実が明らかになった。すなわち、中核的自我領域を構成しながらも、もう1つの中核的自我領域として現実水準で形成されつつあった志望校・東京生活の領域の消滅をもたらした両親は、本事例にとって人格非適応を形成し、弘前での生活全般は無適応領域として主体的に疎外し全般的な不関与の態度をとる事で弘前における自我均衡を辛うじて維持していた。

そこで「何かを求めて」合宿に参加し、第1日目に、《自分の問題》の表出を求められた。その際、中核的問題を表出するためには、問題形成の場としての両親との関係領域を象徴的・作話的な《両親の消去》によって一旦無適応領域として分化して始めて、両親、ひいては弘前での生活全般に対する激しい拒否感情の表出が可能になった、と解し得る。そして合宿期間中は、かかる無適応領域の適応領域への上向は不能だったことになる。だが、本合宿において問題形成の場が一時的にはあれ無適応領域に移行できたことは一定の場面的効果と位置づけ得よう。それは合宿期間内すら持続しなかったようであるが、かかる体験は、合宿後における分化を水路付けることがありうる点、さらに、《弘大生》については、主訴形成の場が無適応領域から適応領域へと移行する契機が与えられた点、合宿後の「成長」が期待できる。事実、合宿後本事例は、弘前での生活は「相変わらずピーマン（“中味なし”の意）」と語っているものの、同専攻学生や次年度所属研究室との交流を開始、更に、進級後も研究室に対する適応を獲得している。即ち「主訴形成の場以外での社会的行動空間における社会適応」が達成されている点に長期的な合宿効果を求めることができる。

但し、主訴＝問題形成の場（家族）での適応や、大学生活の人格適応の側面については不詳である。

事例3（女子）

所属学部^(註5)の就職情勢、特に当該学部で最も標準的進路である教職が、所謂「丙午問題」の影響から極めて入職困難な状況のなかで、専攻とは全く無関係の福祉・矯正関連職種に就くにはどうすればいいかと、具体的職種を選定した上で、相談室に相談した事例である。かかる職種は実は高校時代の志望職業であり、高校時代には福祉関係のボランティア活動にも携わっていて、第1志望大学も福祉関連学部であった。（但し受験はlevel-upして某教育大学→不合格・浪人→翌年弘大入学）

この職種は極めて難関の採用試験がある現実を本事例は熟知しており、積極的に情報収集や当該機関への訪問なども行なっていた事から、厳しい就職状況からの逃避的態度によるよりも、むしろ当初志望の実現～自己実現を求める、現実水準での展望であることが明らかであり、合宿が臨床的話題の講演を配し、また集団過程とそこでの自・他の変容過程に触れ得る、という知的なmeritが予想できたので、参加を勧めたのである。主訴形成の場は、所属学部・学科の就職状況の現実～将来展望との関連での、空想水準での職業領域、になる。家族・友人関係は問題にならない。

合宿への参加動機としては、中心的なものはg型、それに「参加者である心理学専攻の人達と話したい」というd型が加わる。合宿では、上記職種の入職試験についてそれに詳しいファシリテータ達から個人的にききだし、その中で、少なくとも1～2年の深く広い受験準備が必要なことを認知するとともに、その準備は教職等の他職業に入職したとしても実践的応用の効く内容をもつ事も認知し、職業関連認知枠組の拡大がもたらされる。さらに、ファシリテータ達が「親味になって相談ののってくれた」事を望外のことと受けとめるに至り、ファシリテータとの出会い・ファシリテータによる自我支持も獲得する。参加動機も充足される。

他方、「出会い」に関しては「当たりさわもなく過していきこう」と積極的関心を示さなかったのだが、集団内で自己表出しようと努力する参加者達の態度に直面することによって、「互いに無干渉的な」表層的な日常の対人関係との異質性（むしろ、「日常の対人関係のよそよそしさ」と評すべきか）を認知し、大学ではこれまで穏していた高校時代のneuroticな体験を語るなど、集団へ他者に開かれた態度を作りあげ、自らの克服の過程を語ることによって他参加者を勇気付け支えていくに至る。即ち、集団的雰囲気^(註6)に適応（集団適応）することによって、他者の人格適応を支え（他者適応）、更に、対人関係への新たな

な態度形成がみられた。かくて合宿は「非常に疲れたが、この出会いをこのままで終らせたくない。月に一度はこのメンバーで集まってみたい」とプラスに評価される。

合宿後、本事例は、具体的な受験勉強プログラムを作成し、社会学を中心とする受験課目について相談室に度々質問に来るなど、勉強を進めていくことになる。

最終的に、志望進路を、当該職種又は地方公務員に限定、当該職種は不合格となったが、「状況次第で再挑戦」の態度を維持している。その点、当該職種志望の態度が合宿体験によって支えられているという意味で長期的効果があったといえるが、今後の展開に俟つことになる。

以上、本節では、先に提出した記述・分析の枠組で事例を検討し、枠組の有効性を間接的に示した。

Ⅲ 要約と展望

本稿では、先ず、我々の実施した group approach の経過を全体的概況として述べ、次に効果検討のための事実認識の枠組 A(i)・(ii)、B(i)・(ii)、C(i)・(ii)、D(i)・(ii)を提示し、また、参加動機 a～h を分類して、それに沿って参加者における全体的・個別的な「効果」を場面的・長期的の二つの側面で検討して来たが、これらは、基本的に、枠組の適用にとどまる。固り実践活動にとっては、追求すべき価値内容とその構造の提出が必須の課題であって、本論では効果検討(Ⅱ章2節)の中でいくつかの示唆をえてきたものの、事実認識学の成果はいかに積み重ねても規範学に到達しない。従って今後の重要な課題は、一方では、個人—グループ—背景社会(文化)体系の三者関連構造を事実認識学的水準で厳密に分析していくこととともに、他方では、「積極的価値確定」(清、1977)を通して、臨床実践的価値—個人—グループ—背景社会(文化)体系の四者関連構造の中に事例やグループを定位し、「臨床社会心理学」(豊嶋・清、1978参照)へと進まねばならない。^(註6)

さらに事実認識の水準における課題としては、第1に、ここで記述・分析のために提出した諸概念と概念枠組の緻密化、第2に、ここで定義した効果としての適応回復の過程及び機制を追求し、その類型化に進まねばならない。そして、更に徹視的に、例えば我々が試みに使用してきたソシオメトリー技法(豊嶋ら、1977、山崎ら、1978)などを導入した、グループにおける集団過程の検討や、例えば、参加者のもつグループ内での役割概念とそれへの参加者の態度、役割概念間の interaction とその変容過程の追求、などが課題となるであろう。特に役割概念に関しては、勧誘文によって参加者達は暗黙裡に自—他の intensive な interaction に対する積極的あるいは消極的な構えを形成して参加して来る。例えば、すでに示唆したように、case 1 では G S I での Y-G に関する体験の表現、case 2 の拒否感情の表出などは、かかる構えがプラスに機能した例であり、逆に、動機 g 型では intensive interaction に対するマイナスの態度を導いているようにである。

これらの点の解明が我々の今後の「長期的」な課題であり、それらについて今後実践—研究報告を続けていく所存である。

註

- (1) 本相談室では筆者の前任者の主唱によって、学生部との緊密な協力の下に、50年度に「セミナー自己発見」、51年度に「第1回・出会いのためのグループ合宿」を実施してきた（未報告）。今回の合宿は、これらの経過・成果の緻密な検討に立脚して実施すべきものであったが、52年に相談員の異動があり、筆者にとって今回は最初の試行的実践となった。その意味で本論は、次回実践への予備的考察の位置に留まる。
- (2) 「概況」は各ファンリテータからの報告をもとに、筆者の責任においてまとめたものである。
- (3) 人格の社会（文化）適応・非適応、社会（文化）の人格適応・非適応及び無適応の概念、またⅡ章3節の両側適応・片側適応の用法については、文献1、5、8を参照されたい。
- (4) 「健康調査票」に基づく。これについては、本誌「Ⅲ、調査報告」を参照されたい。
- (5) 53年3月の当該学部卒業者の53年3月現在の就職率（就職希望者に対する）は約40%、3年8月1日現在で漸く73%、うち教職確定者は僅か18名（就職希望者の28%）に過ぎない。（本学学生部厚生課調べ）
- (6) かかる立場に立って集団治療実践における事例記述から価値内包的概念を排除しようとした試みとしては、文献9を参照されたい。なお、文献9では、集団治療の評価は、暫定的な価値選択に立って行なっている。

文 献

1. 安倍淳吉、1958、社会的非適応、牛島・沢田編「教育社会心理学講座Ⅰ・人間形成の社会心理学」、84—123、明治図書。
2. 池田由子、1975、集団精神療法の最近の動向、精神医学、17(2)、4—19。
3. 石郷岡泰、1976、昭和50年1月学生相談シンポジウム〈川渡会場〉報告、「学生相談仙台シンポジウム（第8回全国学生相談研究協議会報告）」、5—13、東北大学学生相談所。
4. 小谷英文、1976、エンカウンター・グループ（Ⅰ）—逆効果に対する臨床心理学的研究、学生相談室活動報告書(1)、31—42、広島大学総合科学部学生相談室。
5. 清 俊夫、1973、学校場面における文化非適応の社会心理学的研究—適応概念の検討との関連を中心に—、年報社会心理学(4)、203—218。
6. 清 俊夫、1977、文化非適応の社会心理学的研究(4)—異常性の規準について—、日本社会心理学会18大会論文集、120—121。
7. 対馬 忠・福井康之、1972、学生相談とグループ・アプローチ、厚生補導、79、2—9。
8. 豊嶋秋彦、1976、産業組織における初期適応の社会心理学的研究—職場・人格間の適応・非適応構造を中心に—、年報社会心理学(7)、151—165。
9. 豊嶋秋彦・橋元峰子・安井由紀、1977、昭和51年度集団指導訓練実施報告、白木沢編「心身障害児の集団指導訓練・4」、29—81、宮城県総合福祉センター。
10. 豊嶋秋彦・清 俊夫、1978、社会心理学の課題と接近法—理論的ならびに実践的 Relevance をめぐって—、年報社会心理学19、41—53。
11. 山崎剛・大庭美智子・石郷岡みつ子、1978、児童グループ実施状況、白木沢編「心身障害児の集団指導訓練5」、11—52、宮城県総合福祉センター。